

# 北京大學藏漢簡『蒼頡篇』の綴連復原

福田哲之

キーワード 北大本『蒼頡篇』 劃痕 綴連

## 一、北京大學藏漢簡『蒼頡篇』の概要

北京大學藏漢簡『蒼頡篇』（以下、北大本）は、二〇〇九年に北京大學に寄贈された西漢竹書的一篇であり、二〇一五年に全簡の寫眞圖版・釋文等を収録した北京大學出土文獻研究所編『北京大學藏西漢竹書「壹」』（以下『北大壹』と略記<sup>1</sup>）が出版され、その全容が明らかとなった。やや多岐にわたるが、はじめに北大本の概要を簡條的に列挙しておく<sup>2</sup>。

①竹簡の枚数は、完簡五十三枚、殘簡三十四枚。綴合後に得られた整簡六十三枚、殘簡十八枚<sup>3</sup>、合計八十一枚。

②字数は、完整字一三一七字、殘字二十、合計一三三七字。

③各簡の滿寫字数は二十字。

④完整簡の簡長は三〇・三〇・三〇・四センチ、幅は〇・九〇・一・〇センチ。

⑤竹簡はもと三道編繩で、上下の兩端に接近したところ及び中間部の簡面の右側に契口があり、契口付近には多く編繩の痕跡が残存

する。

⑥竹簡の背面には劃痕があり、その形状はいずれも簡の左上端あるいは左上端に接近したところから右下に向かって斜行し、その一単位はおおよそ十七八枚の簡に跨がり、末簡の劃痕は簡端から十三センチ前後のところまで止まっている。

⑦各章は冒頭の二字を標題とし、第一簡と第二簡との二簡の正面上端部に右から左の方向で書寫されている。現存する章の標題は「顛頊」「雲雨」「室宇」「輪」「鵲鴉」「漢兼」「祿」「闊錯」「幣帛」「悝」「賈購」の十一。同様の標題の方式は、睡虎地秦簡『日書』や周家臺秦簡にもみられる。

⑧各章はすべて文末に該章の字数を明記する。字数を記した現存の竹簡は十枚あり、標示された字数は、最多が「百五十二」、最少が「百四」。

⑨句式は四字一句、二句一韻。全篇は韻部により章分けされ、多くは單韻で、音の近い二つの韻部の合韻も少数ある。

⑩同一韻部の章が若干あり、それらは連続して綴連されていたようである。

①各章の句の構造には、羅列式と陳述式の二種がある。羅列式は字義が近似・類似（對義も少數ある）あるいは相互に連繫した字詞が組み合わされて排列されるもので、大多數の句はこの形式に屬する。

なお『北大壹』における簡文の各韻部の順序は、原本の韻部の排次が不明であるため、便宜的に王力『漢語史稿（修訂本）』（中華書局、二〇〇一年）の上古韻部表の順序に依據しており、本稿の各章における検討の順序もこれに準じた。

北大本の利點としてまず挙げられるのは、竹簡八十一枚、殘存字數一三三七字という數量の多さである。北大本以前に最多であった阜陽漢簡『蒼頡篇』（以下、阜陽本）の五四〇餘字を大きく上回り、『漢書』藝文志の記述から計數される漢代改編本の總字數三三〇〇字の三分の一以上にあたる。しかも、阜陽本は出土した一二五點のすべてが殘簡で、そのうち八十點は殘存字數三字以下の殘片であったのに對し、北大本は竹簡八十一枚のうち完簡・整簡が六十三枚を占め、良好な保存状態であった。

さらに注目すべきは、竹簡背面（簡背）の劃痕により、竹簡がどのような順序で綴じられていたかという綴連の復原に大きな手がかりが得られた點である。その結果、章内における句の構成や章と章との連繫など、阜陽本では知り得なかつた構造面に關する多くの知見が得られ、『蒼頡篇』研究に多大な進展がもたらされた。

『北大壹』の綴連は、劃痕をはじめとするこれらの新見にもとづききわめて妥當性の高い復原と言えるが、なお若干の検討の餘地も殘さ

れているようである。本稿では、『北大壹』に收録された「北大藏漢簡《蒼頡篇》一覽表」<sup>4</sup>のデータにもとづき筆者の檢證を踏まえ、北大本の綴連について若干の試案を提起してみたい。

なお、本稿に掲げる釋文・劃痕示意圖・復原圖の凡例は以下のとおりである。

一、釋文は原則として『北大壹』にもとづくが、作字の便宜上、通行の字體に従う場合がある。また、釋文中の□は缺字、………は缺句、〔 〕は推定本文を示す。

二、釋文・劃痕示意圖・復原圖の各簡の末尾に付した算用數字は『北大壹』の簡號、ローマ數字（ⅠまたはⅡ）は押韻位置の形式を示す。

三、劃痕示意圖・復原圖は竹簡の背面の略圖であり、正面の本文とは逆順となる。殘存竹簡は實線、想定される缺簡は點線で示し、篇章の構成との關連を示すために、便宜的に正面の章題（□は缺字）および章末數字（〔 〕は推定本文）を記入した。

四、劃痕示意圖・復原圖中の斜線は竹簡背面の劃痕のおおよその位置を示したものであり、その下の横向きの數字（例えば 25.5.1）は竹簡背面の劃痕の簡首からの距離（上の數字が左痕、下の數字が右痕）を示す。また、前後の竹簡の劃痕から想定される缺失簡の劃痕の距離については括弧へゝで括って示した。これはあくまでも前後の劃痕から推定した近似値であり、實際には一〜二ミリ前後の誤差を含む可能性がある。

五、復原圖中の“網掛け”は、劃痕刻入後に書寫の錯誤などによつ



整理者は次のように述べている。<sup>(9)</sup>

從綴連的實際情況看，一般相鄰的簡其背部劃痕也是相連的。但也有在個別情況下，依據簡文內容應該相連的簡，其背部劃痕有一枚簡距離的間斷，例如陽部韻的「顛頊」章中，簡四八與四九、依照簡背劃痕、中間應有一枚簡的間隔，但依簡文（參考阜陽雙古堆漢簡《蒼頡篇》文）、二簡實應相接。此種情況表明，不排除有個別簡因書寫錯誤而被剔出的可能。

したがって先に挙げた指標のうち、韻部、押韻位置、字義などの諸點で綴連が想定されるにもかかわらず、劃痕の中斷が認められる場合は、廢簡の存在が考慮され、想定される廢簡の劃痕と前後の劃痕との間に整合性が認められれば、その蓋然性は高いと判断される。

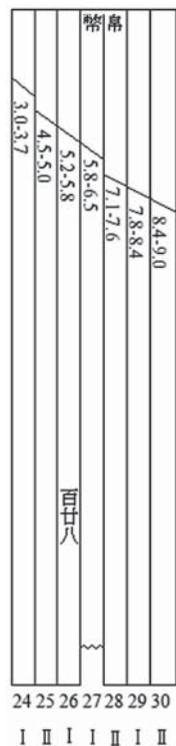
次章では、『北大壹』の同一韻部における綴連の中から、このような廢簡にかかわる二つの試案を提起してみたい。

### 三、同一韻部における綴連

#### (一) 魚部（簡24～簡30）

まず『北大壹』が魚部に分類する竹簡から、簡24～簡30を取り上げる。劃痕は簡24と簡25および簡27と簡28との二箇所中斷する（圖3）。これに對して原釋は、簡27と簡28とを綴連する一方、簡24と簡25とを區分している。

圖3 劃痕示意圖（簡24～簡30）



簡27—簡28の綴連は、兩簡が「幣帛」章冒頭の章題簡にあたることから疑問の餘地はない。しかも兩簡の間には〈6.5.7.1〉の劃痕をもつ竹簡の存在が想定され、劃痕の中斷は廢簡に起因すると見なし得る。

一方、整理者が簡24と簡25とを區分する理由は、劃痕の中斷にあると見られるが、兩簡には、押韻部の一致および簡序と押韻位置との整合に加えて、字義の面からも簡24の末句「薺芥萊菹」と簡25の首句「菜與蓼蘓」との間に、草名の集中的排列という共通性が認められ、劃痕を除いて先に挙げた指標をすべて満たしている。

さらに劃痕についても、簡24（劃痕3.0.3.7）と簡25（劃痕4.5.5.0）との間に〈3.8.4〉の劃痕をもつ竹簡の存在が想定され、劃痕の中斷は廢簡に起因する可能性が指摘される（圖4）。





がそれに該当する。このうち陰入對轉の關係にある之・聯合韻部については、敦煌本・居延本・阜陽本・水泉子本などから検出された殘簡が、北大本によって「□祿」章や「漢兼」章の一部であることが判明し、各章の實態が明らかとなった。一方、幽宵合韻部および脂支合韻部については、『北大壹』によってはじめて指摘されたものであり、これまで不明であった旁轉の關係をもつ合韻の實態を明らかにする上で、重要な意義をもつと考えられる。本章ではこのような意圖から、幽宵合韻部および脂支合韻部を中心に検討を加えてみたい。

### (一) 幽宵合韻部の検討

幽宵合韻部に屬する竹簡は簡14・簡15の二簡である。押韻字に韻部を付した釋文と劃痕示意圖を掲げる。

鴨煦省閣、冷竈退包 <sup>簡</sup> 、穗稍苦嫉、挾貯施表 <sup>簡</sup> 、狄署賦實、14 幽 I	8.9.9.4
貉驚駭驚 <sup>音</sup> 、贛害輟感、甄設燔窠 <sup>音</sup> 、秬補麻苔、鑿藁鞠□。15 宵 II	8.2.8.9
14 15	

兩簡の綴連は他の漢簡『蒼頡篇』によって裏付けることはできず、字義の面においても傍證とし得るほどの積極的な關連は見いだされない。したがって整理者が簡14と簡15とを綴連して幽宵合韻部としたのは、劃痕の連續を主要な根據とすると見なされる。一方、秦樺林氏は原釋が不明とした簡15の末尾字を殘劃と押韻との關係から「槽」と推

定している。<sup>14</sup>「槽」は幽部に屬することから、これに従えば簡14・簡15の押韻は幽部↓宵部↓幽部と展開したことになる。

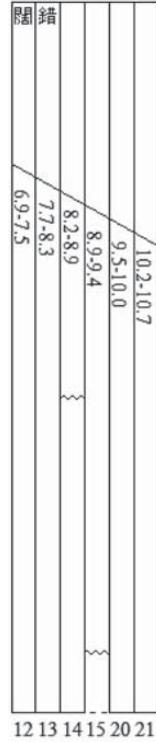
こうした狀況を踏まえれば、簡14―簡15の前後には、まず幽部韻に屬する竹簡との綴連が想定されよう。そこで幽部韻の諸簡(簡16―簡21・簡23)の中に、簡15(劃痕8.9.9.4)の後に接續し得る劃痕をもつ竹簡を求めると、簡20(劃痕9.5.10.0)が検出される。

一方、幽部韻の諸簡の中には、簡14(劃痕8.2.8.9)の前に接續し得る劃痕をもつ竹簡は見いだされないが、注目されるのは、之部に屬する簡13(劃痕7.7.8.3)に適合する劃痕が見いだされることである。<sup>15</sup>之部と幽部とはいわゆる旁轉の通押關係にあり、之幽合韻は西漢時期において広く認められる。<sup>16</sup>こうした狀況を踏まえれば、簡13と簡14との劃痕の連續は暗合ではなく、之幽合韻の存在を示す証左と見てよいであろう。

本節で指摘した簡13―簡14および簡15―簡20の綴連は、いずれも二句ごとの切れ目にあたるため、字義の面からの傍證を得難いが、簡序と押韻位置との關係はそれぞれ整合する。整理者によってすでに簡12―簡13、簡20―簡21の綴連が明らかにされていることから、これまでの検討を踏まえれば、以下のような綴連が導かれる。

闊	闊錯整葆、定據越等。稅忠陽圍、鈴鑿閏悝、騁虧刻柳、12 之 I
錯	錯津邱鄙。祁樹鐔幅、芒謙偏有。泫云嬖姪、髣峩絳臬。13 之 II
鴨煦省閣、冷竈退包、穗稍苦嫉、挾貯施表、狄署賦實、14 幽 I	
貉驚駭驚、贛害輟感、甄設燔窠、秬補麻苔、鑿藁鞠□。15 宵幽 II	

𦉳𦉳然稀、支𦉳膠膠。竊𦉳鱗鱗、鱣𦉳鯉鯉。𦉳𦉳<sup>(17)</sup>羶羶、20 幽 I  
粉𦉳𦉳𦉳。冤𦉳暖通、坐𦉳護求。𦉳𦉳堪況、燎𦉳煎炮。21 幽 II



復原の妥当性については今後さらに慎重な検証が必要であるが、これに従えば、「闕錯」章は之幽・幽宵合韻部であった可能性が指摘される。

### (二) 脂支合韻部の検討

続いて脂支合韻部に移ろう。脂支合韻部に属する竹簡は簡39のみである。押韻字に韻部を付した釋文と劃痕示意图を掲げる。



簡39の押韻の状況を踏まえれば、その前には脂部韻、後には支部韻に属する竹簡との綴連が想定される。そこでまず、簡39と脂部韻に属する簡44―簡45との関係について検討してみよう。

簡44―簡45の釋文・簡劃痕示意图は以下のごとくである。兩簡の劃痕は連續しないが、阜陽本 C062 に兩簡の接續を裏付ける「蒙期未旬」

の本文が見え、整理者の綴連もそれにもとづくと考えられる。また簡45は章字數の表記をもつ章の末尾簡であることから、その後には接續する二簡は次章の冒頭部にあたり、章題（各一字）を有することが知られる。

梧城邸造、殽穀𦉳者。候騎淳沮、決議篇稽。𦉳𦉳蒙期、44 I  
未旬隸氏。百卅四 45 II



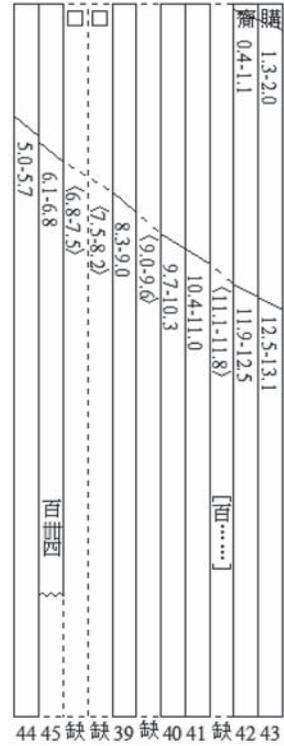
一方、簡39は劃痕から簡45よりも後に位置したと見なされるが、簡39には章題は見られず、簡45と簡39との綴連は否定される。ただし劃痕の分析によれば、簡45と簡39との間に二簡分の缺簡の存在が想定され、その二簡はすなわち章題をもつ冒頭の二簡に相當すると考えられる。

以上の検討により、簡39と脂部韻に属する簡44・簡45との綴連は以下のごとく復原される。

梧城邸造、殽穀𦉳者。候騎淳沮、決議篇稽。𦉳𦉳蒙期、44 脂 I  
未旬隸氏。百卅四 45 脂 II

□ ……………、……………、……………、……………、……………、  
 □ ……………、……………、……………、……………、……………、  
 □ ……………、……………、……………、……………、……………、  
 審普諫敦、讀飾柰璽。瘡斷瘡疖、𦉳𦉳𦉳𦉳。淺汗盱復、39 脂支 I





本節の最後に、簡39「𦉳」字の韻部の問題にふれておきたい。整理者も言及するように、「𦉳」字の韻部については、陳復華・何九盈『古韻通曉』（中國社會科學出版社、一九八七年）が支部に歸入するのに對し、郭錫良『漢字古音手冊』（商務印書館、二〇一〇年）は脂部に歸入し、見解が分かれている。<sup>19)</sup> ここまで『北大壹』に従い、支部韻字として検討を進めてきたが、假に「𦉳」が脂部韻字であれば、簡39は脂部に屬し、脂支合韻部とは見なされないことになる。しかしその場合においても、先の復原によれば、脂部の押韻をもつ簡39の後に缺簡を挟んで支部の押韻をもつ簡40―簡41が綴連することになり、「齋購」章の前に位置した章が脂支合韻部であることがあらためて指摘され、『蒼頡篇』に脂支合韻による綴連が存在した可能性は排除されないと考えられる。

## 結語

本稿では、北大本の綴連について劃痕を中心に分析を加え、若干の試案を提起した。本稿の分析はすべて『北大壹』のデータに依據して

おり、あくまでも假説の域を出るものではない。それにもかかわらず敢えて試案を提起したのは、『蒼頡篇』における章内および章相互の綴連、とくに合韻部における綴連の實體を明らかにする上で、北大本の劃痕はほとんど唯一の手がかりとなるものであり、『蒼頡篇』復原のためには、その最大限の活用が不可欠であるとの認識による。

今後は原簡にもとづく検証が課題となるが、その際に注目されるのは、復原した綴連における竹節の位置である。既述のごとく、劃痕は簡牘に分割する前の段階で竹筒ごとに加えられたと推測されており、一連の劃痕をもつ一組の竹筒は同一の竹筒から作成されたと思し得る。<sup>20)</sup> したがって竹節の痕跡が残存していれば、その位置が合致するか否かで、復原の當否について一定の検証が可能となると考えられる。こうした検証を通して、本稿で試みた劃痕による綴連復原の問題点が明らかとなり、延いてはそれが『蒼頡篇』研究の進展の一助となれば幸いである。

## 注

- (1) 北京大學出土文獻研究所編『北京大學藏西漢竹書「壹」』（朱鳳瀚編撰、上海古籍出版社、二〇一五年）
- (2) 詳細については『蒼頡篇釋文注釋』（『北京大學藏西漢竹書「壹」』第六七―六九頁）、朱鳳瀚「北大藏漢簡《蒼頡篇》的新啓示」（『北京大學藏西漢竹書「壹」』第一七〇―一八〇頁）参照。
- (3) 殘簡の枚數に關連して、ここで簡66と簡22との綴合を指摘しておきたい。原釋は簡22を以下のように釋讀し、「聊」を押韻字とみて幽部に分類する。  
 ……說對接、嘗饗聊聊。…… 22  
 圖版によれば、完簡の第三句の二字目と三字目との間に位置する編繩痕が「掇」字と「嘗」字との間に見えることから、原釋文の句讀は以下のように修正される。



頡篇》釋文商兌（六）」（武漢大學簡帛研究中心「簡帛網」、二〇一五年十二月二十四日）に従い、「慘特」にあらためた。

(18) 劃痕中斷の原因については、簡44の右痕と簡45の左痕との距離が〇・四センチであり、簡44と簡45との間に廢簡を想定した場合、前後の竹簡の劃痕の差距〇・七センチに比べてかなり短いため、やや長めではあるが隣接簡との差距と見なすのが穩當であろう。

(19) 整理者は、脂支合韻部の押韻字の韻部について「在本韻部内、押脂部韻的字是鹽、押支部韻的字是堅（按「堅」「榮」字、《古韻通曉》歸入支部、《漢字古音手冊》歸入脂部）」（『蒼頡篇 釋文 注釋』前注5、第一〇六頁）と注記する。

(20) 劃痕と竹節との關係については、竹田健二「清華簡『楚居』の劃線・墨線と竹節の配列」（『中國研究集刊』第五六號、二〇一三年、湯淺邦弘編『清華簡研究』汲古書院、二〇一七年再收、第三五三〜三七一頁）、賈連翔『戰國竹書形制及相關問題研究——以清華大學藏戰國竹簡爲中心』第六章簡背刻劃工藝的發現與研究（中西書局、二〇一五年、第八二〜一〇二頁）參照。

〔附記〕

本稿は筆者の以下の口頭発表にもとづく。

・「北京大學藏西漢竹書『蒼頡篇』の編聯復原」（第六十三回中國出土文獻研究會、二〇一六年七月十七日、大阪大學）

・「北大漢簡『蒼頡篇』の編聯復原に關する試論」（第五十八回漢字學研究會、二〇一七年十一月十八日、キャンパスプラザ京都）

また、廣瀬薰雄先生（復旦大學出土文獻與古文字研究中心）には、校正の段階でご指正を賜ることができた。發表に對してご質問やご意見を賜った各位と廣瀬先生に、あらためて御禮を申し上げたい。なお、本稿はJSPS科研費17K02730の助成による研究成果の一部である。

（島根大學學術研究院教育學系教授）